

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：平成29年5月31日（水）16：30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：田中委員長 他

<質疑応答>

○司会 それでは、お伝えしていた時間になりましたので、ただいまから原子力規制委員会の定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いします。

それでは、質問のある方は手を挙げてください。アベさん。

○記者 日本経済新聞のアベです。よろしくお願いします。

委員長の残りの任期の関係で2つお伺いさせてください。

1つが、今月26日に国会の方で更田委員が正式に同意人事が承認されたと思います。これで委員長は9月に退任されて、9月19日から新体制になることが正式に決まったと思います。まず、率直に、正式に決まったというところの受けとめについて、お聞かせいただけますか。

○田中委員長 特にありませんけれどもね。前にもここで申し上げましたけれども、ある意味では、まだほっとするという時期でもないですね。まだ3ヶ月ちょっとあって、いろいろ課題もありますから。

○記者 分かりました。

もう一つですけれども、9月にかわってからの懸念するところについて伺いたいのですけれども、今日の国会答弁を私もネットで聞いていたのですけれども、更田委員への期待のような言葉もあったと思います。

その一方で、発足から5年間、ずっと大黒柱として組織の中心にいた委員長が抜けるということは、やはり規制委員会にとっても大きな転換点というか、大きな位置付けにはなると思うのですね。そういった意味で、何か9月以降の今懸念されているようなところというのは、どういったところがあるかというのを教えていただけますか。

○田中委員長 私は余りそういう懸念は持っていませんけれどもね。この5年間、御存じのように、規制委員会とか規制庁とは一体何かという感じできたと思うのだけれども、ある程度そのポジションがかなり社会的にも見えるようになってきたので、皆さん、努力をされていますから、そのマインドは引き継いでいくのだろうと思いますので、特に懸念することはありませんけれどもね。

○記者 分かりました。ありがとうございました。

○司会 ほかにございますでしょうか。ヤマグチさん。

○記者 プラッツのヤマグチと申します。

東電の新々総特の件でお伺いしたいのですが、御存じのように、先般、原子力事業においては、再編・統合ということを明確に打ち出していらっしゃいました。その中で、では、どうやったら各電力会社が余り乗り気でないような統合なり、共同事業体ができるのでしょうかという質問に対して、廣瀬社長は、今、再稼働で各社はやはり課題を抱えていると。そこら辺を何か切り口にして、共同事業体なり、再編などの可能性を探れるのではないかとというような趣旨のお答えをされました。

お伺いしたいのが、1社でなくて2社が合わされば、知見などを持ち寄るような形で今以上に再稼働を促進するとか、可能性を高めるとかというようなところは、委員長御自身、長年御覧になってこられて、あり得ることだと思いでしょ。なければ、その理由もお伺いしたいのですが。

○田中委員長 廣瀬さんとか、新々総特に書いてある、新々総特は見ましたけれども、廣瀬さんがどういう趣旨でおっしゃったか分かりませんが、前に規制委員会はエネ庁を呼んで、それで、審査対象の母体が変わり、責任が変わるのだったら、ちゃんとそのことを言うべきだと。当面は変わりませんということだったから、東電のあれに対してはそのまま続けようということをやっていますから、一緒になったらどうするかはちょっと分かりませんね。

○記者 その質問は私が社長に対してしたわけなのですが、ただ、各社、機会があるごとで、なかなか足踏みをしていると、興味がありませんというお答えを聞くにおいて、その場で、では、どうしたらそういう切り口が開けるのでしょうかとお尋ねしましたら、再稼働で課題があるので、そこから何かしら切り口として可能性を見出せるのではというようなお答えだったので、つまり、一般論でも結構なのですが、1社より2社が合わさった場合には、再稼働への課題を克服できそうな面というのはあり得るのかという極めて一般的な質問なのです。

○田中委員長 いや、ないのではないですか。

○記者 どころ辺が余り見当たりなくそうだと。

○田中委員長 特にプラスになる要素というのが何かあるのかというのは。

○記者 知見なり、1社、2社が合わさっても、なかなか有機的には働きにくいものなのですか。

○田中委員長 同じ電力でも、どこでもそうでしょうけれども、違った会社と一緒にになると、大体フリクションが起こるのだよ、普通はいろいろな意味で。そういうことが安全上プラスになるというのは余り考えにくいですけどもね。分かりません。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかにございますでしょうか。ヒラガさん。

○記者 新潟日報のヒラガと申します。

柏崎刈羽原発の断層の関係で伺います。

地元の断層を研究する専門家グループから、原発周辺の地質調査を再びしてくださいということで、審査のやり直しを求める要請書が規制委員会に出されたかと思いますが、規制委員会としては、この問題について論点は残っていないというお立場だったかと思うのですけれども、その後、要請書に対する対応はどのようになりましたでしょうか。

○松浦総務課長 要請書をいただきまして、事務方と、あと石渡委員で、今、中身を拝見している段階でございます。

○記者 専門家グループは、現地調査ですとか、専門家グループへの聞き取りということで求めていたと思うのですけれども、それも含めてこれからということによろしいですか。

○松浦総務課長 要請書を今、拝見していますし、技術的な話ですので、事務方、石渡委員も含めて、今、中身を確認していますので、それからの話だと思います。

○田中委員長 一般的に言うと、専門家と称する人はいっぱいいますね、特に1F事故の後、いろいろな分野の専門家が雨後のタケノコみたいに出てきて、いろいろおっしゃるのだけれども、私どもは別に耳をふさいでいるわけではないのですけれども、柏崎刈羽については、専門家の方が言っているだけのことで判断しているわけではないということは、私は国会でも申し上げています。ですから、今後、それはそれとして、まだ審査中ですから、結論はこれから出していくことになると思いますけれども、そういう理解でいただいた方がいいと思います。

○記者 最後なのですけれども、断層に関する審議について、ヒアリングだと県民の方々が見られなくて、ちょっとわかりにくいということで、議論するのであれば、是非審査の場で、公開の場でという声も上がっていますが、そのあたりについてはいかがでしょうか。

○田中委員長 それはヒアリングではなくて、ちゃんと審査の場でやっているのではないの、石渡委員会でね。

○司会 こちらから補足させていただきますと、当然、審査会合に行くまでの間には、審査ヒアリングとか、いろいろな過程を経て、どういったものを審査で議論したらいいのかが決まっていきます。今の件につきましては、今、審査ヒアリングの方で確認している状況などは見られると思いますので、そういった技術的な議論を経て、審査会合に当たるかどうかは、先ほど松浦から申し上げたように、今後決まっていくことでございます。

○司会 ほかにございますでしょうか。ハナダさん。

○記者 NHKのハナダです。

今日、浜岡4号機の非常用ガス処理系で、先月までおよそ7カ月間、2カ所で弁を取

り外したまま、去年10月には燃料を移動させていたということで、保安規定違反になりました。定例会の中で、伴委員から、長期間プラントが停止しているのが緊張感が失われているのではないかと懸念があるという御発言とかもありましたが、委員長は今回の浜岡の事案、どのように見られているか、御所感を伺わせてください。

○田中委員長 定例会での議論がよくわかりませんが、確かに連絡不足ということがあって、そういうことが起こったのだらうと思うのですが、安全上のインパクトについてはどうだということは確認していますけれども、特に大きなインパクトがあったわけではないということです。

○記者 安全上のインパクトは確かにそういった形だと思えるのですが、7カ月も弁を取り外していたのを誤認していたということは、プラントの機能維持としては、保守管理を含めてよくないと思うのですが、その点についてはどのように御覧になられているでしょうか。

○田中委員長 放置していたのか、そういうあれだったのか、そこがよくわかりませんがね。

○志間安全規制調整官（BWR担当） 補足させていただきます。中部電力から聞いている話におきましては、工事部門から運転管理部門に対して、弁が外されているという情報が運転管理部門に行っていない状態であって、運転管理部門の方は、弁はついているというような状態でありました。運転管理部門は、弁がついていないところを弁がついていると誤認したのは、工事管理部門から弁が外れているという明確な情報が行っていなかったところが問題だということでは認識をしているところでございます。

○司会 ほかにございますでしょうか。今、手が挙がっているのはお一人ですが、ミヤジマさんが最後でよろしいですか。では、最後にミヤジマさん。

○記者 『FACTA』のミヤジマです。

先生の5年間の中で、最初に地震の先生がいなくなり、紅一点だった女性がいなくなり、最後に福島出身の先生が去られて、私から言わせると、3.11前の原子力関係の組織の構成に戻ったなど。本当に風化させずに、女性、地震、福島というのですかね、そういう要素は更田さんに取り入れてもらわないと、私などはイメージわかないのですが、風化してしまったという批判に対しては、どう答えていったらいいのですかね。

○田中委員長 御懸念の向きはわからんこともないですが、私どもも女性を何とか入れようということでは努力したのだけでも、なかなか適任者がいなかったということがあります。規制委員の要件として専門家ということもありまして、そういう点で探すと、なかなかいなかったということがあって、いずれ女性を何とか入れたいということはずっと皆さん共有していると思います。

風化するというのは、風化してはいけないと思いますので、常日ごろ、私も申し上げていますけれども、風化しないように、やはり努力していくことが大事だと思いますけ

れども、委員だけでそれが決まるわけではありませんので。

○司会 それでは、本日の会見は以上とします。お疲れさまでした。

—了—